

鎮守の森のローカルガバナンス

聖地としての森

嶋田 奈穂子

京都大学東南アジア研究所連携研究員

はじめに

集落の生産や人々の暮らしを見守り、見張る“村のカミ”がいて、時々、その存在を感じてしまうような地域が、東南アジアからユーラシア大陸の東沿岸、日本列島にかけて広がっている。例えば日本では、本州を中心としてそうしたカミを祀る場の多くを「神社」と呼ぶ。鹿児島南部では「モイドン」、ラオスではラオ族の集落だと「ブー・ター」と、呼び名は様々であるが、その空間的特徴はどこもあまり変わらない。森や木立といった場所が多い。その中に何本かの巨木があることもある、いわゆる“鎮守の森”なのである。そして、それがどの程度の樹木の密集度であっても、人はそこを「森」と呼ぶ。

このような空間を、私ははじめから「森」と意識して研究してきたわけではない。そもそも、私の関心は「村のカミ」を祀る場にある。だからそれがどのような様相であろうと、集落全体が共有する思想・信仰を表象する空間であり、集落の共有財産でありさえすれば研究対象となり得た。ただ、調査地の一つであるラオスの「村のカミ」を祀る場を見て歩くと、現実にはそのどれもが森や木立だった。日本の神社のように、「鎮守の森」とはいえ神殿や拝殿などの建築物がその主役になっているものではなく、ラオスでは、森であることがすなわち“村のカミ”が居るところ、という感じであった。自分たちの「カミ」とそれを祀る場所である「森」を、同一視している感さえあった。このような人々の森についての語りや森の捉え方を目の当たりにして、「村のカミ」を祀る場は、あるべき姿として「森」なのかもしれないと考え始めたのである。そしてその森には、「資源」や「生物多様性の保全」などといった今日盛んに論じられている森林の意義とは異なる、全く別の価値があるように思われた。

本稿では、ラオスの3つの民族(ラオ、黒タイ、カム)における「村のカミ」を祀る場について、その空間的

特徴である「森」の概要、人との関係性、そして1975年以降の社会変化に伴う変容について記述し、最後に「村のカミ」を祀る場、つまり聖地としての森について、私見を述べたい。

1. ラオスの3民族と「村のカミ」を祀る場

ラオスの黒タイ、カム、ラオの「村のカミ」を祀る場は、呼称や祀るカミの性質などは民族ごとに異なるが、空間的な特徴は共通して森や木立である。どの民族においても、集落全体の生産に関わる儀礼、個人的な祈願の場として存在している。しかし、1975年の社会主義革命以降、少数民族における精霊信仰が禁止され(菊池ほか 2010)、地域や民族によって影響の大きさには差があるが、「村のカミ」を祀る場の縮小、消滅、儀礼の取り止めなどが相次いだ。「村のカミ」を祀る場にとってはまさに激動の40年だった。同時に、人々にとっては暮らしの規律の軸が「村のカミ」から国家や社会政策に代わろうとする時期だったといえる。

本稿で取り上げる民族は、ラオス北端部ルアンナムター県ルアンナムター郡の黒タイ、カム、そしてラオス南端部チャンパサック県コーング郡のラオである。ラオス北部には、ビルマ、中国、ベトナムの山間部から移動してきた少数民族が生業に合わせて山間部高地、山間部低地、盆地の河川沿いに住み分けている。その中でカムは山間部で主に焼畑を生業とし、黒タイは盆地の河川沿いで水稲耕作を生業として暮らしてきた。ただし、山地民に対する低地への移住を奨励する政策などによって、この住み分けは著しく変化しているのが現状である。本稿で扱うカムはこの政策の影響を最も強く受け、多くの集落が山間部から低地に移った。一方、ラオはラオスにおける主要民族である。本稿で扱うラオは、ラオス南部からカンボジアへと続く平野およびメコン中州に、メコンに面して集落を形成し、水稲耕作を生業として暮らしている。

2. 黒タイの「村のカミ」を祀る場

2-1 ドン・セン

ルアンナムター郡には13の黒タイの村がある。どれも盆地中央の平野部に位置し、主に水稲耕作を行っている。彼らは19世紀以降にベトナムとの国境付近の山間部からこのター川流域に入り、水田を拓いて集落を作った開拓民である(嶋田 2015)。村を作るには、まず「村のカミ」を祀る場を作るところから始める。それはドン・センと呼ばれ、森でなければならないのだという。ドン・センに祀られる「村のカミ」は、もともとその土地にいた先住者か、その村を開いた祖先である。

ドン・センは、必ず集落よりも上流部に隣接していなければならない。なぜなら、自分たちの汚い生活排水がドン・センに流れてしまてはいけなからである。また、彼らはもう1つ森を持っている。それは墓の森である。この墓の森は、集落よりも下流部になくはならないという。墓から穢れたものが居住区に流れてくるのを恐れているためである。このように、集落に対する森の位置は、その森の性格によって明確な決まりがある。

2-2 ナー・ルー村

具体的な森の様子を、ナー・ルー村を例に見てみよう。この村はルー川から農業用水を得ている。このルー川を軸に、集落の上流部にある森がドン・センで、集落とは少し離れた下流部にある森が墓の森である。

ナー・ルー村は、120年前に黒タイの7家族がこの土地に移り住んだことに始まる。彼らはまず、ドン・セ

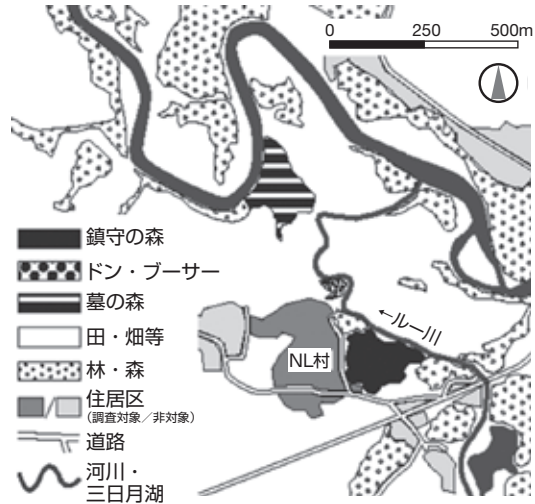


図2 ナー・ルー村
筆者作成

ンと墓の森にふさわしい森、あるいは森となる場所を選んだ。「ムラのカミ」の場所になるので、ドン・センの森はなるべく大きな方がいい。場所が決まると、そこを囲んで、それ以降は一切手を付けない。この結果、「村のカミ」を祀る場は大きな森に育つのだという。

ナー・ルー村のドン・センは比較的明るい森で、中央にコク・ハイと呼ばれる巨木があり、そこで儀礼が行われる。普段はあまり足を踏み入れることはないらしく、林床にはツル科の草などで鬱蒼としている。ドン・センには「パニャ・ピー(Phanya-Phi)」と「パニャ・チャイ(Phanya-Chai)」という2人の男性が祀られている。モン・クメール系民族である彼らは、この土地の先住者であった。黒タイが入ったときにはすでにパニャ・ピーとパニャ・チャイは亡くなっていたが、土地の先住者ということでドン・センに祀ることにしたという。

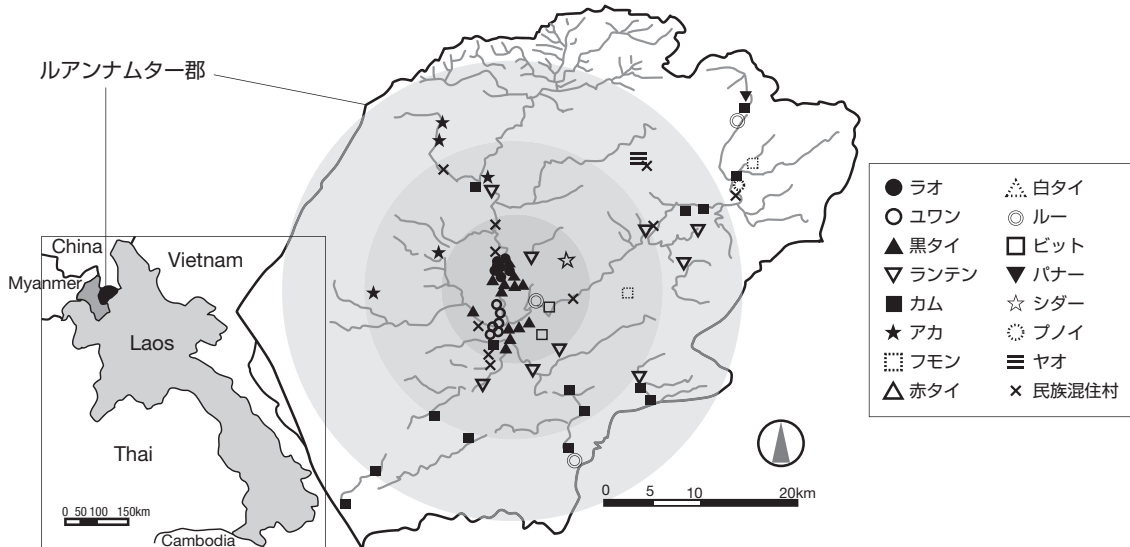


図1 ルアンナムター郡の民族分布
筆者作成

2-3 消えたドン・セン

ドン・センは、13村のうちナー・ルー村にしか残っていない。他は1975年に儀礼を中止して以降、消滅した。政府の方針に従って森を伐り、代替土地利用として提案された学校や村の役所の建設を受け入れたのである。

多くの村で、「昔のドン・センは大きな森で木を伐ってはいけなかった。もっとも、怖くて近寄れなかった」と聞いた。何が怖かったのかと聞くと、「Phi(精霊・カミ)だ。あと、サルなどの野生動物もたくさんいて、横を通るだけで怖かった」と言う。そんな森をどうして伐り拓くことができたのか、これには伏線がある。1968から69年にかけて、ナムターの人びと戦火を逃れて一時離村している。数年後村へ戻ると、ドン・センの森が兵士によって伐られ、小さくなっていったという。それは、黒タイの人々には衝撃だったと思う。あの怖くて近寄れなかった大きな森が、伐られていたのだ。この事実は人々の森への畏怖、恐怖の思想を揺るがしたにちがいない。それからすぐに1975年の革命となり、精霊信仰が禁止された、彼らは相次いで儀礼を取りやめた。

ブン村では、ドン・センの跡は今、小学校になっている。かつては1ヘクタール以上ある大きな森だった。ドン・センは村を守って見ているもので、なくてはならないものだったと副村長が言う。人が多く死んだりすると、ドン・センが何か怒っているんじゃないかと、すぐに思った。鶏や水牛が突然死んだりしても、ドン・センにその理由を伺いに行かなくてはならなかった。大きい木にはPhi(精霊・カミ)が住んでいるといわれてきたから、ドン・センは怖かった。しかし、革命後、儀礼を取りやめた後、人々が田を拓げるために少しずつ木を伐るようになった。年寄りたちは怒ったし、木を伐ることはやはり怖かったが、それよりも田を拓げる欲求の方が強かったそう。そして数年前、本当に小さくなったドン・センを拓いて学校を建てることになった。それでも、工事をする人が夜寝ていると、大勢の泣き声が聞こえてきて眠れなかったと言う話を聞いたという。やはり、伐ってはいけなかったのだと言わんばかりに、副村長は言う。

今、校舎の裏には数本の木が生えている。それはドン・センの森の名残だそう。「この木にはあまり近づいてはいけない」と子供に言うのに全く聞かないと、副村長がぼやく。そこには菩提樹の大木もあったそうだが、最近枯れてしまったらしい。副村長は、「村

のカミ」が死んだから、菩提樹も枯れたのだ」と腐った株を見ながら言った。

3. カムの「村のカミ」を祀る場

焼畑民であるカムは、カム・ユアン、カム・ビットなど、グループがより細かく分かれている。言語が全く異なるグループさえあるため、「村のカミ」を祀る場の呼び名は一様ではないが、森の位置や儀礼については共通している。儀礼は焼畑の安全と豊作を祈願、感謝するものである。時期は焼畑の作業工程と結びついており、伐開前、播種前、収穫後の年3回に集落を挙げて行う。また病人が出た際など、その時々で儀礼は行われる。

カムの村は盆地の山間部に点在していたが、先述したように、1996年以降、政策によって多くの村が低地に移り、人々はゴム栽培に従事している。この影響は「村のカミ」を祀る場も受けている。最初に、このような経緯で出来た新しい村の一つ、ファ・ナ村をみよう。

3-1 ファ・ナ村

ファ・ナ村では、「村のカミ」を祀る場をロイ・グンと呼ぶが、現在の村にはない。彼らが山間部の村から現地へ移住する際、政府は新しい墓の森は用意してくれたが、ロイ・グンの森は用意されなかったのだ。そのため彼らは、ロイ・グンを元の村に「置きざり」にして来た。話し手である村長は、本当に申し訳なさそうに言った。移住を決めたとき、ロイ・グンには「ここに残ってください」と伝える儀礼をし、「言い聞かせた」という。

村長は一度、元の村へ行ってみようと思ったことがあるらしい。しかし、その道の途中で引き返してしまった。「村のカミ」が置き去りにされたことを怒っているのが怖かったのだと、彼は言った。私はここで、少し意地悪な質問をした。「元の村に戻れるなら、戻るか」。すると彼は、「元の村に戻れるのなら、元の村から少し離れて村をつくる。でないと置いてきぼりにあった「村のカミ」が怒って、皆死んでしまうから。」と言った。そんなに怖いなら連れてきたらよかったのにも言う、「距離が遠かった。元の村からここまで歩いて8日かかる。年寄りが集まって話し合い、そう決めた。」ということだった。ロイ・グンと政策の間での、苦渋の決断だったのだろうか。

3-2 ホワイ・ダム村

一方、3つの小さな集落が合併してできたホワイ・ダム村はどうか。山間部を通る幹線道路に面したこの村は、道路の両脇に並んだ住居の背後に米倉が並び、その奥に森が続いている。「村のカミ」を祀る場はこの森のもっと奥にあるという。そこには「村のカミ」だけを祀っているのではないらしい。森に入ると、確かに小さな祠が3つ並んでいた。これは手前から、森、米、空の精霊を祀るためのものと村長は言う。そして精霊は、森、米、空以外にもたくさんいると言う。こうした精霊の好きな食べ物は、ブタ、ニワトリ、アヒル、イヌなどの家畜と、ヒトである。だから祠には、これらの動物や人の土形が供えてある。ヒトの土形には、口に血が塗ってある。森は、こうした名もなき、そして明確に分けることはできない無数の精霊がいるところだ、と説明された。

4. ラオの「村のカミ」を祀る森」

4-1 プー・ターの森と爺さん

ラオの「村のカミ」を祀る場は、プー・ターと呼ばれるフタバガキ科の木が茂る森である。コーング郡の村々は、そのほとんどがメコンに沿って形成されている。プー・ターの多くは、集落の背後に広がる田とその奥の森との境界に位置している(図4)。

沼が隣接する場合も少なくない。多くの村で、「なぜ、この場所なのか」と聞いたが、ほとんどの場合「爺さんがそこが良いと言うからだ」と言われた。爺さんは、そこは「涼しくて気持ちがいい」と言うらしい。爺さんとは、このプー・ターに祀られている「村のカミ」である。ほとんどが男性で、村の開拓時にすでにそこに居住していた先住者である。ラオではなく、モン・クメール系などの異民族であることが多い。本来この地域にはモン・クメール系民族が広く居住していた。400年ほど前からそこにラオが入植し、水田を拓いて広まったのである。プー・ターに祀るカミがモン・クメー

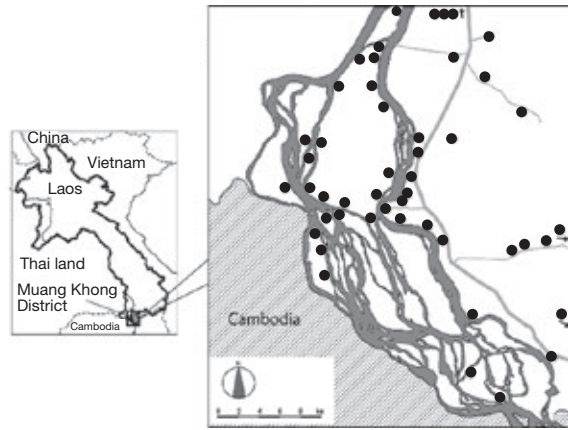


図3 コーング郡の集落分布
筆者作成

ルの場合、儀礼の際にはクメール語を用いる。供え物はモン・クメールの好物であるオトカゲを欠かさない。プー・ターのカミが中国系の爺さんだと言う村が一つだけある。そこではラオの伝統行事であるボートレースやロケット祭は行われぬ。「爺さんが嫌がるからだ」と村人は言う。その代わり、儀礼では爺さんが好きな爆竹を鳴らすそうだ。このように、プー・ターのカミは非常に人間臭い。そしてそのプー・ターの森は、黒タイヤカムで見たものとは少し違って、それほど恐れられてはいない。なぜなら村人は、集落全体の儀礼以外でも、日常的にプー・ターの森に通っているからである。

4-2 プー・ターの森と暮らし

ラオは、プー・ターの森を恐れるというよりも、親しい存在として認識しているような雰囲気がある。ある村のプー・ターに調査に入る際、その村の霊媒師が付き添ってくれた。彼はプー・ターの森の中にある小さな小屋に上がり、その奥にあるご神体のような石の前にローソクを灯した。そして小瓶に入った酒をトロトロと石にたらしながら、爺さんに話しかけた。「日本から、女の子がやってきましたよ。でも勝手に入ったとって、彼女に悪さをしないでくださいね」このようなことを頼んでくれていたらしい。畏れる相手ではあ

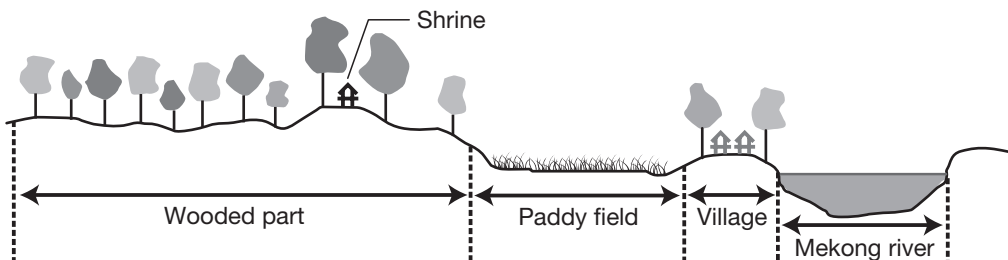


図4 プー・ターと集落の位置
高谷好一作成の図を一部改変



写真1 プー・ターの森で「ゲ」をする女性

るが、親しみがあふれていた。

もう1つの村でプー・ターの森に入ったとき、先客がいた。2人の女性だった。彼女らは森の中央にある小屋の前で、ローソクを灯して酒を供えていた。

2週間前に、家でお金がなくなったので、プー・ターに相談しにきたのだそう。お金はどこか？と爺さんに聞くと、ある場所を教えてくれた。そして先日、そこにお金が戻って来た。だから、今日はそのお礼に来たのだという。ラオは、プー・ターに何かの祈願することを「バ(Ba)」といい、その祈願が叶った後にするお礼を「ゲ(Ke)」と呼んでいる。例えば、息子が遠くに旅出つとき、家族は彼の無事を祈ってバを行く。日常生活の時々、人々はこの森を訪れ、爺さんと語らうのである。

4-3 森から社へ

コーング郡のプー・ターの森の変容には、大きく2通りある。1つが、森の縮小である。道路の敷設、公設市場の設置、田の拡大などで、森は伐り拓かれていく。昔は大きな森だった、と多くの村で聞いたが、実際の森は小さく、田の中に浮く島のような感じだった。もう1つが森の消滅であった。その代わりに寺の中に祠が置かれ、爺さんはそこに移されていた。儀礼はかろうじて残っているのだが、内容が少し変わる。これまで爺さんに供えられていた酒が用いられなくなった。そして、この2つの森の変化に並行するのが、社の巨大化と主体化である。大きな森があり、儀礼の時の供え物の場として簡素な社が置かれていたのが、プー・ターのもとも形であったが、森が縮小や消滅に伴い、社が大きくなり、立派な神殿へと変わっているものもいくつか見られた。

プー・ターの調査のお礼にいくらかのお金を村長に

渡そうとすると、「プー・ターの社のトタンを何枚か寄付してほしい」と催促されることが何回かあった。コンクリート造りの飾り立てた神殿を見ることも多かった。そこには寄付をした者の名前と日付が刻まれている。多くの場合、カナダやオーストラリアなど、海外に移住した村人の名前が彫られている。村から出て成功した結果を「村のカミ」を祀る場へ報告し、反映させている。ラオの「村のカミ」はその棲み家を、森から建物へ移している。

5. 南の森の論理

5-1 森の人格

森にも人格があるようだ。これが、ラオスの「村のカミ」を祀る場の森を歩いた率直な感想である。正確には、森に人格を見出す社会があるようだ、である。

ラオスのいくつもの集落で、私は「村のカミ」とそれを祀る場について聞き取りをした。どこの村でも、丁寧な説明を受けた。しかしふと気がつくと、それが「村のカミ」の話なのか、あるいは「村のカミ」を祀る場としての「森」の話なのか、その境界があいまいになることがよくあった。特に黒タイとカムではそうだった。例えば、黒タイの村では、「ドン・センは怖かった」と聞く。しかしそれは、「村のカミ」が怖いのか、そのカミがいる「森」が怖いのか、話の主体が「カミ」と「森」とで明確に区別できていないことがよくあった。「ドン・センが見守ってくれる」という話でも、「村のカミ」が村を見守るのか、「森」が見守っているのか、主語はあいまいだった。カムの村でも同じような経験をした。この感覚を最も的確に表したのが、「村のカミ」が死んだから、ドン・センの木も枯れたという、あの黒タイのパサク村の副村長の言葉だろう。カミと森は、一体だったのである。

5-2 ワンネスの思想

人びとは、「村のカミ」と同様に、あるいは同一のものとして「森」も怒ったり、見守ったりすると考えている。「森」の人格。人間以外の生物に人格をもたせるのは、南東アラスカの針葉樹の森に住む先住民の例がすぐに思い浮かぶ。彼らは、自身の祖先を身近な動物だと信じている。そしてどのように自分たちが祖先から生まれ出たかという物語を家の柱に刻み、受け継ぎ、クラン(族)を形成している。ワタリガラスのクラン、クジラのクラン、オオカミのクラン。祖先と信じられ

ている動物たちは、現実には先住民にとっての貴重な食糧であった。その存在は、食糧となっただけではない。毛は衣類にもなったし、骨は釣り針などに加工されて生活用具にもなった。こうして先住民は動物たちに生かされてきたのである。動物たちの命で、人間が生きている。動物と人、すべては一つ。これをワンネスの思想という(古川 1998)。この思想のもとで、先住民は周辺の自然資源を敬い、利用し、持続的な生活を築いてきた。

今日盛んに、人と自然の「共生」の必要性が叫ばれている。人と自然は共に生きなければならない。確かにそうだ。しかし、ここで私はワンネスの思想を考える。ワンネスの思想は、「共生」とは似て非なるものだと。「共生」とは、他者と他者が共に在る、ということである。人と自然の共生ということは、人と自然は個別の存在ということ。しかしワンネスは違う。すべては一つ、同一のものなのだ。

5-3 南の森の論理

人間は、どうしたって人間である。すぐに欲が出るし、すぐに他者をコントロールしたがる。自然に対してもそうである。しかし、自然を他者と考えるのではなく、人間と同一のもと考えることができたなら、我を抑制し、無理な利用をせず、自分の肉体に対するように接することができるのではないか。ただし、人間がこのワンネスの思想を維持するのは、簡単ではないだろう。そこで現れたのが、動物を祖先と考える思想だったのではないかと、私は考える。動物から人間が生まれた。祖先である動物は当然、人間と同じように怒り、悲しみ、喜び、愛することができる。そしてこの物語を語り継ぐことによって、人と自然の同一視、つまりワンネスの思想を常に維持し、人間の自然に対する欲を抑制してきたのではないか。このワンネスの思想は、言い換えれば、自然を他者と捉える二項対立の関係を超越するための、北の森の論理だったのではないだろうか。これが南に森にいけば、それは「村のカミ」を祀る場」としての森、すなわち「鎮守の森」となったのだらうと、私は考える。自分たちの祖先や先住者をカミとして森に祀る。そのカミと森は、しばしば同一視される。こうすることで森に人格が生まれ、森に対する人間の我が抑制される。「鎮守の森」こそは、人と自然の二項対立の思想を緩和する南の森の論理ではなかったかと考えるのである。



写真2 プー・ターの森

おわりに

“鎮守の森”は、速度の差こそあれ、各地で縮小に向かっているようである。すでに日本の神社では、神社であることの主体性が森ではなく建築物に置かれている。ラオのプー・ターは、まさに今の日本の神社の形に向かっているかのようである。こうした流れの是非はともかく、鎮守の森が変容していく中で、私は一度この森の意味を論じてみたかった。鎮守の森は、人間の思想の表象である。その場が、生態系保全に対する有効性や、水などの資源管理のために創られ、保たれてきたと考えるのは分かりやすいし、そういった解釈がされがちである。でも、何か本質的な部分が足りない気がしていた。その足りない部分、それが人と自然が主客一体となるための“論理”だったのではないか。これこそが、人が聖地として鎮守の森に与えた役割であり、聖地の森の真の価値ではないかと思うのである。

謝辞

本稿に関する調査にご協力いただいた皆様に感謝します。

また、全ての調査を共に行い、共に聖地について考えて下さる高谷好一先生に心から感謝します。

参考文献

- 菊池陽子・鈴木玲子・阿部健一編著(2010)『ラオスを知るための60章』明石書店
- 嶋田奈穂子(2015)「ラオスにおける「村のカミの森」とその変容1——ルアンナムターの3民族の事例」『南方文化』41号 天理大学南方文化研究会
- 古川久雄(1998)「すべてはひとつ」『人間文化』第4号 滋賀県立大学人間文化学部 pp.72-83